

議長賞

堺市立 日置荘中学校 三年

西村 羽萌

可能性をつなげて

ある日の夜、テレビから流れてきたニュースに、私は疑問を抱いた。

「当時十七歳の少年だった殺人犯の実名報道について……」

ニュースキャスターが淡々と語るの、十三年前、神戸市北区の路上で男子高校生が刺殺された事件。十一年間も逃げてきた犯人である「元・少年」には少年法が適用され、刑罰が成年のものより軽くなり、実名報道も行われなかったものだった。被害者の父親の悲痛な心情があらわになったインタビューを聴いていると、私はテレビ画面を直視出来なくなった。少年法が適用される犯人に、強い苛立ちを覚えた。大人も子どもも、年齢は違っても犯した罪の重さは変わらない。ならば何故「少年法」は存在しているのだろうか。私は胸がもやもやして、自分で少年法について調べることにした。

ウェブサイトに記されていた言葉が目に入ったとき、私ははっとした。

「少年法には『未来を担っていく少年たちへの希望』が込められ

ている。」

未来を担う。希望。大人たちは、社会を担う私たちに、平等な「可能性」を与えてくれているのかもしれないと思った。「少年法」と言うから難しく聞こえるだけだ。学校の先生が私たちの間違いをやさしく叱って、これからの行動に期待してくれているのと、何ら変わらないではないか。そう思い納得すると同時に、私の中にまた新たな疑問が生まれる。何故、少年法が適用されるような年齢の少年たちは、罪を犯してしまうのか。周りに、叱ってくれる先生がいなのだろうか。相談できる家族や友達がいなのだろうか。そう考えたが、私にはもっと別の問題があるように思えた。

近年、インターネットの普及が急加速して、私の周りでもスマホを持たない学生の方が少なくなった。検索画面に文字を打ち込めば、どんな情報だろうと簡単に手に入る。その中にはきっと「犯罪に関する情報」や「犯罪を起こそうとする仲間との通信」も含まれてしまっている。学生にとって当たり前な日常となった

SNSから非日常的な犯罪に関する情報がすぐに手に入ること、少年たちの中から「犯罪は絶対にしてはいけないことだ」という認識が薄れてしまっているのかもしれない、と私は思った。そして何より、インターネットに依存してしまうと、大切な現実が見えなくなってしまう。何故ならネット依存症は、自分自身と現実世界の間に大きな「壁」を作ってしまうからだ。家族や友達との触れ合いを忘れSNSに没頭すれば、いずれ身の回りで自分の悩みを相談できるような人はきつとなくなる。そうして孤独感を抱えてしまった人たちが、苦しさから逃げ出すために犯罪行為に手を染めてしまっているのだとしたら……。私にとっても他人事ではない、と思った。私に出来ることはあるだろうか。自分が、そして友人たちが、犯罪を起こしたくなるような孤独感を背負わないようにするにはどうすればいいのだろうか。

私がいちばん大切だと思うことは「会話」だ。どんなことがあったとしても、誰かに声を掛けてもらえれば、少なからずとも、自分はひとりじゃないと思えるきっかけになるはずだ。何も話すことがないのならば「おはよう」だけでもいい。そして、そんな何気ない会話がたくさん続いていけば、ネット依存を断ち切ることも繋がる。SNSで世界中の人々と通信し、自分の居場所を見つけられることで救われた人は数え切れないほどいるだろう。しかし、そんな人たちにも「現実での居場所」はなくてはならな

い。それを作るのに必要なのが会話だ。だからこそ、会話は楽しいものであるべきだと私は思う。悪口を言い合い、誰かを罵倒する会話は必ず誰かを傷つける。最近、私たち子どもは日常会話でよく暴言を使うようになったと感じる。それらの多くが、流行りの「ネットスラング」だ。現在の私たちに必要な心構えは、ただひとつ「インターネットの使い方と向き合う」という簡単なものではないだろうかと思う。

私は今回、青少年の犯罪について考えたことを通して、少年法に裁かれる青年たちは、私たちと何も変わらない子どもだと気付くことができた。日常生活に組み込まれたSNSが、寂しさを抱えた彼らを犯罪へと導いたのだとしたら。少しの会話で、そんな人を減らせることができるとしたら。改めて私は、インターネットという「便利な道具」の利用方法についてよく考え、身近な人との触れ合いや、大切な人との人間関係を深くしていくべきだと思った。

未来を背負っていく私たちには、全員に平等な「可能性」がある。これからの社会がどんな人にとっても、チャンスや人との繋がりに溢れたあたたかいものになっていくことを、私は心から願っている。